

序

筑波大学大学院生命環境科学研究科の地球環境科学専攻の人文地理学分野では、筑波大学の前身の東京教育大学以来、フィールドワークを重視した研究に取り組んできた。とはいえ、大学院に入学したばかりの大学院生のほとんどは、フィールドワークの経験は十分でない。このため、大学院博士前期課程の大学院生は、フィールドワークのトレーニングの場が必要になる。また、博士後期課程の先輩大学院生には、チームリーダーとして、後輩大学院生に聞き取り調査、土地利用調査などのフィールドワークの基礎から応用までの現地指導の経験を積んでもらうことも重要である。

そこで、人文地理学分野では、「人文地理学野外実験」と題する大学院の正規授業（「巡検」とよばれる）として、例年、特定の調査対象地域を選んで、教員と大学院生が現地で1週間、合宿しながらフィールドワークを実施している。通常は、同じ調査対象地域を2年間にわたって調査を行ない、その研究成果の論文は、「地域研究年報」（筑波大学人文地理学・地誌学研究会）に掲載されてきた。しかし、2013年度は、都合により1年間で巡検の成果を研究論文にまとめなければならなかった。このため、1週間の巡検だけでなく、数回にわたる事前の予備調査および事後の補足調査が必要であることも考慮し、筑波大学から比較的近い茨城県南西部に位置する常総市を研究対象地域に選択した。

常総市は、2006年に水海道市と石下町が合併して成立し、2013年の人口は約6.5万人である。フィールドワークのトレーニングの場としての巡検では、調査対象地域が多様な研究テーマを有していることが重要である。この点、常総市は、商業、工業、農業から宗教、外国人労働者問題などに至るまで、非常に豊富な研究テーマを見つけることが可能な地域である。また、1988年および1989年にも、筑波大学の人文地理学関係の教員・大学院生は、茨城県南西部の旧水海道市、旧石下町、旧岩井市、旧八千代町などで、同様の巡検を行ない、その成果は「地域調査報告」第12号（筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ、1990年刊）に掲載されている。今回の巡検では、20年あまりの間の地域の変化についても考察した。

現地調査は、2013年5月19日（日）から5月25日（土）に実施し、教員3名および大学院生27名が参加した。夜のゼミには2013年3月末をもって本学をご退職された筑波大学名誉教授、田林 明先生にご参加いただき、現地調査においては当時ポスドクであった市川康夫氏（現、人文地理学分野特任助教）の、ジェネラルサーベイにおいては地誌学分野の教員である兼子 純助教と山下亜紀郎助教の協力を得た。調査は、大学院生全体を、都市班、メンタルマップ班、エスニック班、農業班、生活班、および宗教班の6つの班に分けて行った。それぞれの班の研究のねらいは、以下のとおりである。

都市班は、常総市水海道地域の中心市街地を事例に、商店の小売と卸売の両需給チャネルが対応するニーズと、その空間スケールに着目し分析を行なった。

メンタルマップ班は、常総市の中心市街地の歩行回遊性を考察するために、メンタルマップを用いて、居住者および就業者の認識について分析した。

エスニック班は、関東圏への製品供給地点として製造業が立地する常総市において、食品製造業に従事する日系ブラジル人の就労形態の特性を、外国人労働力を雇用する人材派遣・請負企業、製造企業、および市役所、ブラジル人学校、エスニック事業所などへの関連主体への聞き取り調査から明らかにすることを試みた。

農業班は、常総市本豊田地区を事例に、1988年・1989年の前回調査の成果と比較検討しながら、都市近郊農村における水田単作農業がどのように維持されているのかについて検討した。

生活班は、常総市における学校給食をめぐる食料供給構造の解明を目的に、学校給食をめぐる地場農産物の活用、供給、生産実態について分析した。

宗教班は、常総市大塚戸町に所在する一言主神社を事例に、崇敬型神社における氏子地域の信仰の特性を地域内の信仰組織や社会組織との関係について考察した。

今回の調査にあたっては、常総市役所の企画部企画課の皆様、産業労働部商工観光課の土井義行様をはじめ、関係部署の方々、さまざまな機関や団体、企業、住民の皆様方からご協力いただいた。また、土地利用図の製図にあたっては、筑波大学生命環境系の宮坂和人技術専門職員と小崎四郎技術専門職員の助力を得た。以上、記して厚くお礼申し上げます。

2014年2月

山下清海